

「障害学生支援に関する授業担当教員アンケート調査」 (平成 27 年度)

1. 実施の背景と目的

障害学生支援センターは、障害学生支援の充実を図るため、平成 27 年 8 月より従来の「障害学生支援室」を「障害学生支援センター」として発展・拡充し、障害のある学生への教育及び学生生活の支援を行っている。このような状況の中、今後の障害学生支援の充実のため課題や方向性を検討するため、障害学生が受講する授業担当教員へ障害学生支援についての現状や意見についてアンケート調査を実施した。

2. 方法

(1) 調査対象者

平成 27 年度前期・後期において、本学で開講された授業のうち、障害学生が受講した授業の担当教員 91 名（常勤 47 名、非常勤 44 名）にアンケート調査を依頼した。

(2) 調査方法

作成したアンケートを対象者に郵送、または E メールもしくは学生ポータルシステムにて送付し、いずれかの方法で回答を求めた。

(3) 調査時期

2016 年 1 月 22 日～1 月 29 日

(4) 回収状況

調査対象 91 人の教員のうち、最終的に 50 人より回答を得られた。なお、回収状況は常勤教員 46% (23 人)、非常勤講師 54% (27 人)、合計 55% (50 人) で、非常勤講師からの回答率が常勤教員からの回答率をやや上回った。回答方法は、調査票 74% (37 人)、E メール 26% (13 人) であった。

3. 調査結果及び概要

各調査結果は以下の通りである。

問① 担当した授業（障害のある学生が受講した授業）について

まず、担当した授業において障害のある学生の障害種を尋ねたところ、以下の結果が得られた。授業において担当した学生の障害種にあてはまるもの全てを選択するよう求めた。

支援件数は、視覚障害 38 件、聴覚障害 87 件、肢体不自由 2 件、病弱・虚弱 5 件、発達障害 5 件、精神障害 3 件、不明 7 件であり、調査対象教員が行った支援数合計は、147 件であった。本学では聴覚障害学生、視覚障害学生に対しての支援件数が合計 125 件と全体の 85%を占めていることが分かる（図 1）。

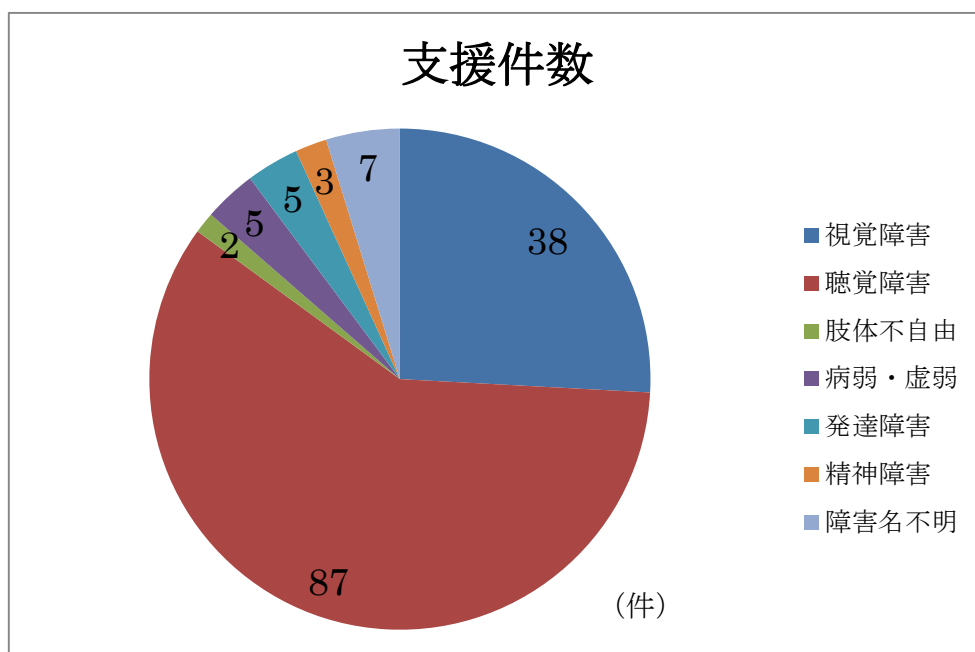


図 1 支援件数

また、障害のある学生、支援を担当している学生へ行った配慮について、今まで行ったことがあるもの全てを尋ねた結果を図 2-1～図 2-7 に示す。視覚障害学生への配慮については、「教材の拡大」が 16 件と最も多い。

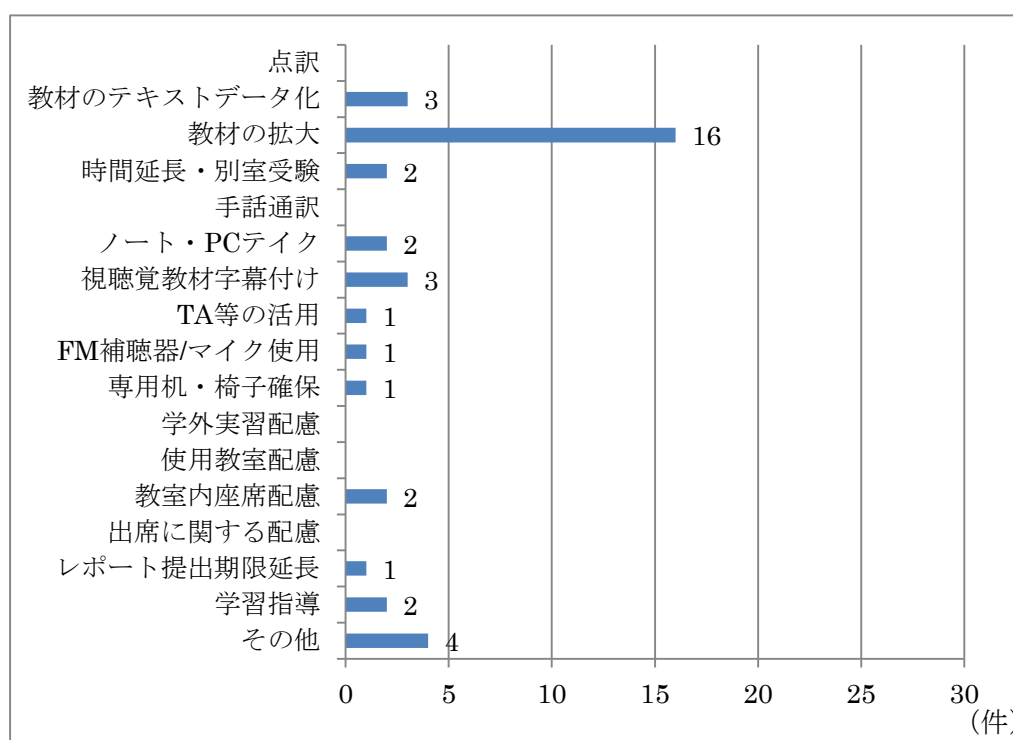


図 2-1 視覚障害学生へ行った配慮内容

聴覚障害学生への配慮については、「ノート・PC テイク」28件と最も多かった。

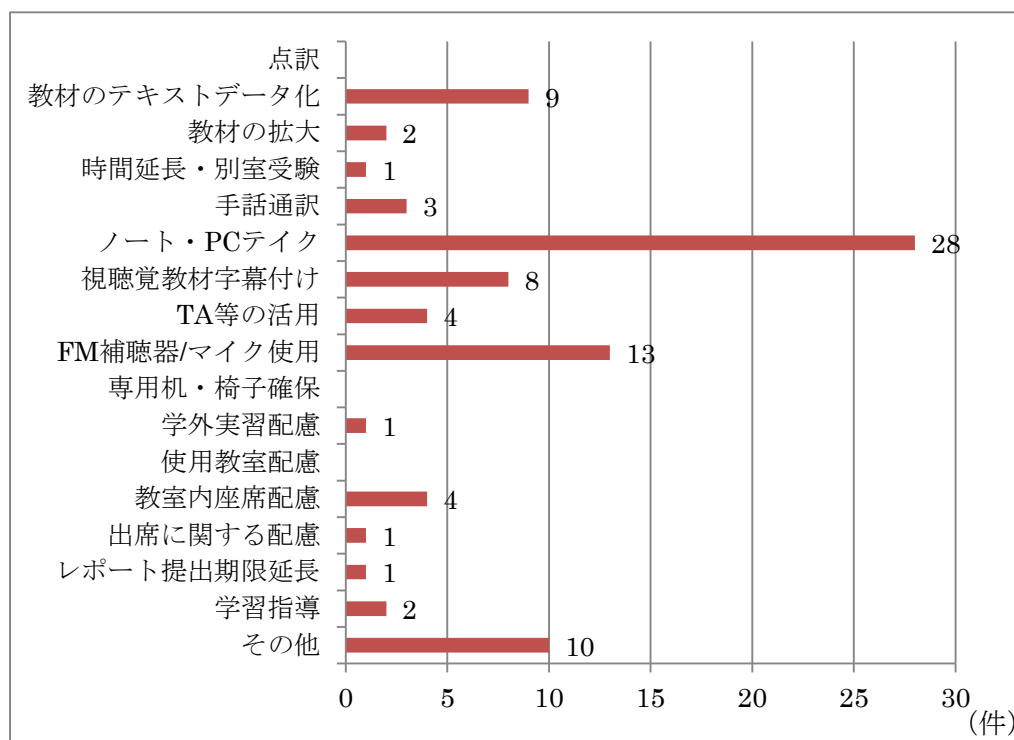


図 2-2 聴覚障害学生へ行った配慮

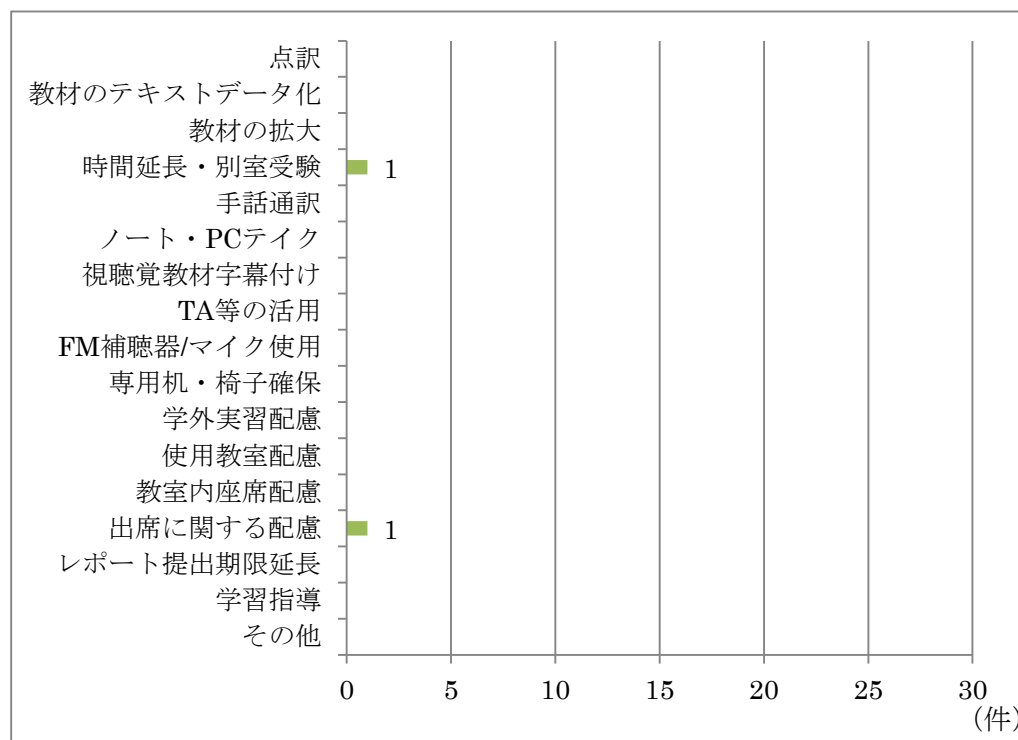


図 2-3 肢体不自由学生へ行った配慮

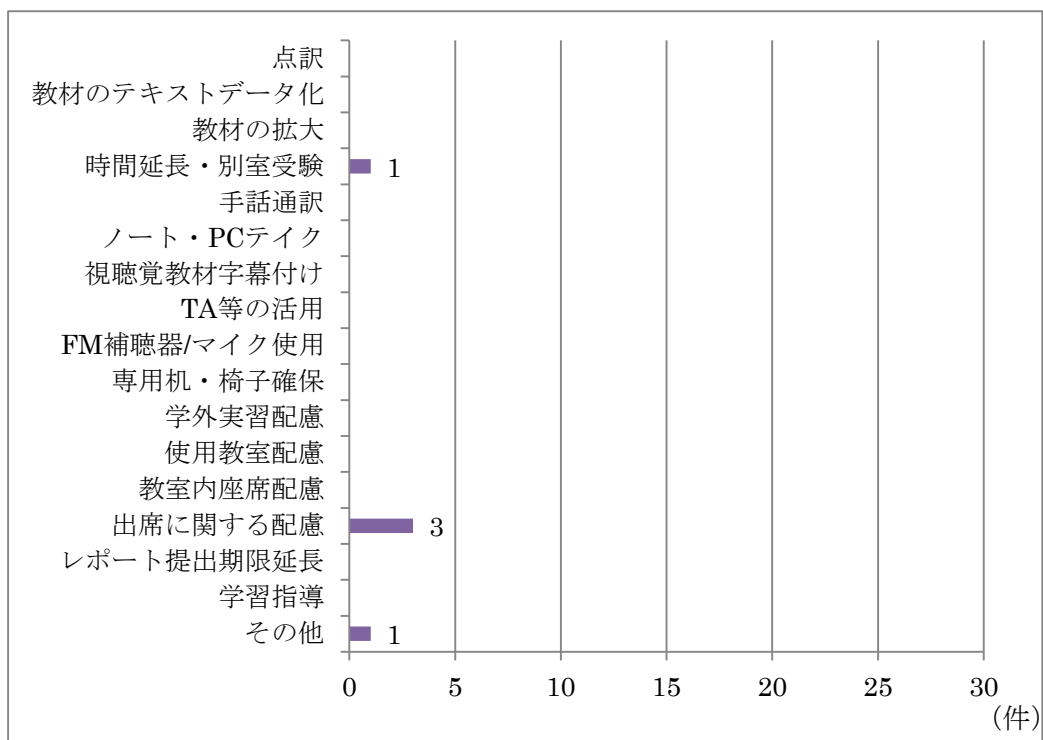


図 2-4 病弱・虚弱の学生へ行った配慮

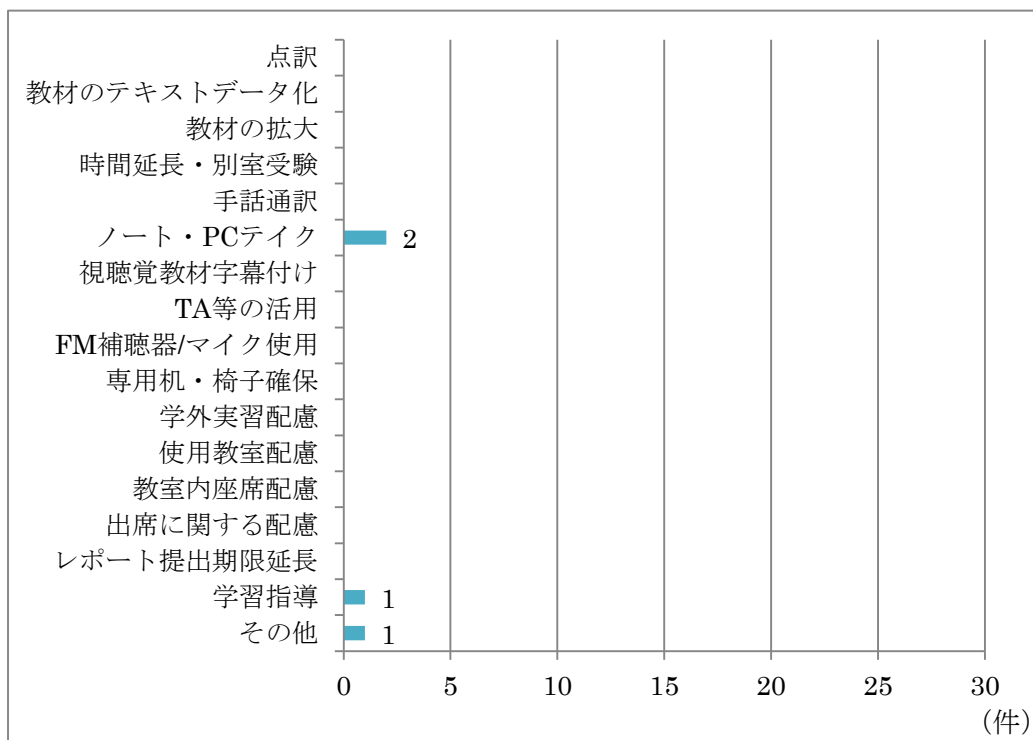


図 2-5 発達障害学生へ行った配慮

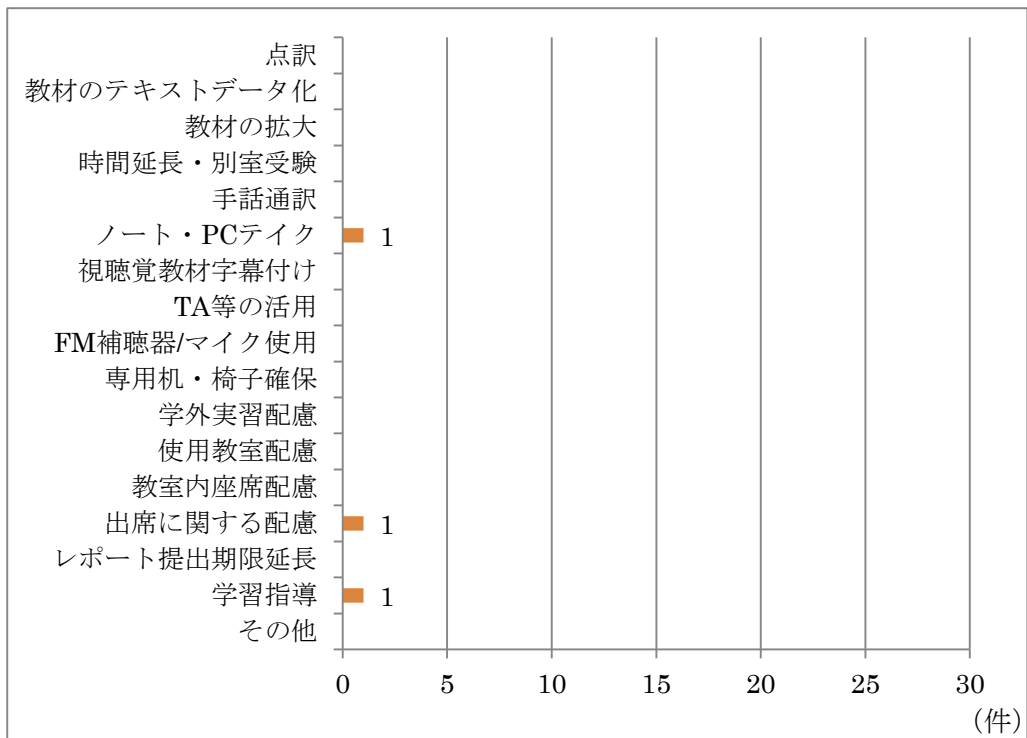


図 2-6 精神障害のある学生へ行った配慮

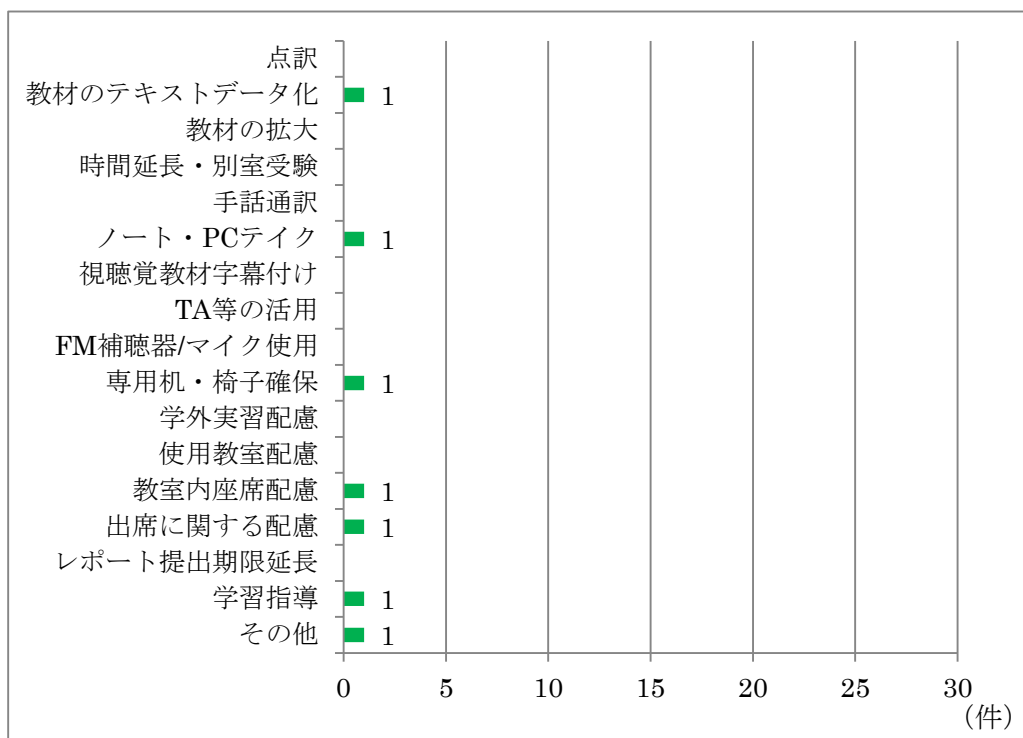


図 2-7 障害のある学生（障害名不明）へ行った配慮

尚、全ての障害種の中で比較しても「ノート・PCテイク」が本学において最も件数が多い

い配慮であることが分かる。「視聴覚教材字幕付け」については、聴覚障害学生への配慮の中で8件の5位であり、聴覚障害学生から視聴覚教材字幕付けに対しての要望がある状況から考慮すると、実際行っている配慮件数としては、低い件数となった。今後授業担当教員に対して視聴覚教材字幕付けの必要性についての案内を強化していく必要があることが明らかになった。

問② 障害のある学生への配慮は、授業の達成目標という観点から見て十分だと思いますか。

上記について尋ねたところ、図3のような結果が得られた。回答者全体では、「少しそう思う」が27人と多く、次いで「とてもそう思う」が15人であった。これらの結果より配慮を行うことで、授業の達成目標が損なわれていることはないものと推測される。

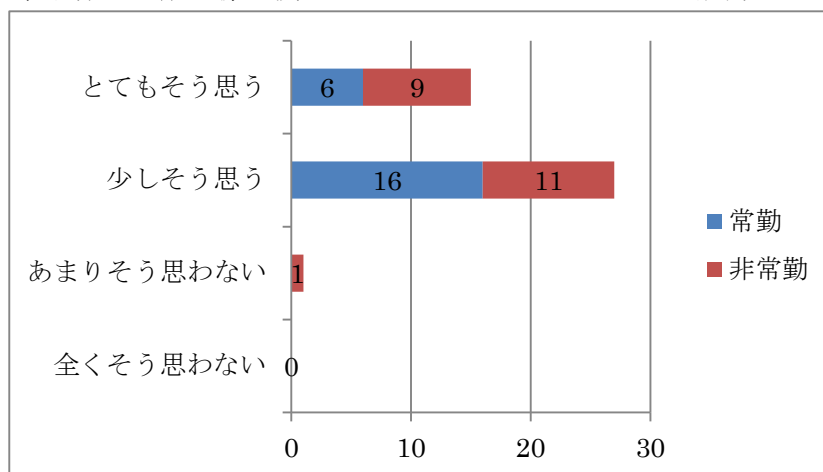


図3 問②の結果

問③ 障害のある学生に授業を行うことで、授業のユニバーサル化が進んだと思いますか。

上記について尋ねたところ、図4のような結果が得られた。回答者全体では、「少しそう思う」が26人、「とてもそう思う」が6人であった一方、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」も合わせて11人いた。

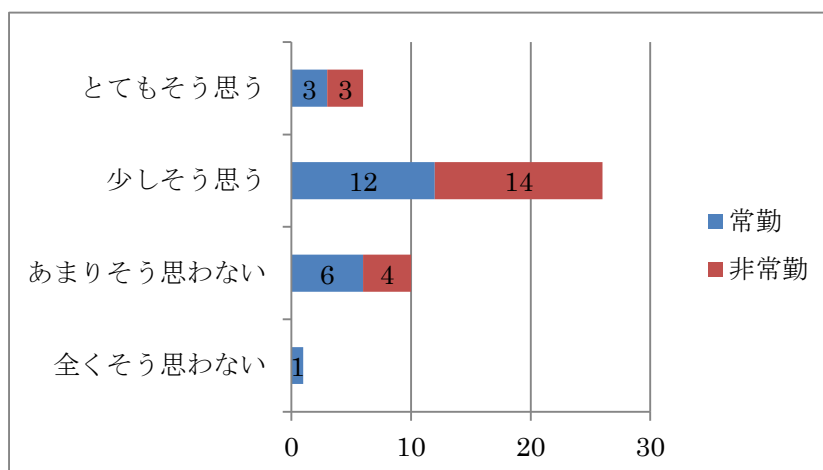


図4 問③の結果

問④ 障害のある学生へ授業を行ってゆく上でFDが必要と思いますか。

上記について尋ねたところ、図5のような結果が得られた。「とてもそう思う」と回答した常勤教員6人、非常勤教員9人であり、「少しそう思う」と回答した常勤教員は10人、非常勤講師は8人であった。これらの回答から授業を行っていく上でFDの実施が常勤教員、非常勤講師問わず求めている事が明らかになった。

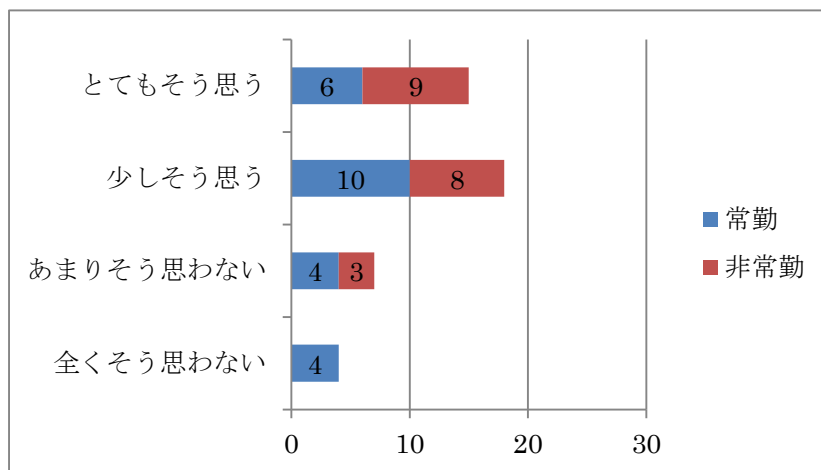


図5 問④の結果

問⑤ 障害のある学生への支援を行うにあたって上手くいかなかった授業について、その頻度をひとつ選んで下さい。

上記について尋ねたところ、図6のような結果が得られた。「たまにある」と回答した常勤教員が10人、非常勤講師が9人であり、常勤教員、非常勤講師ともに授業を行うにあたって上手くいかないと感じた頻度はほぼ同じであることが明らかになった。

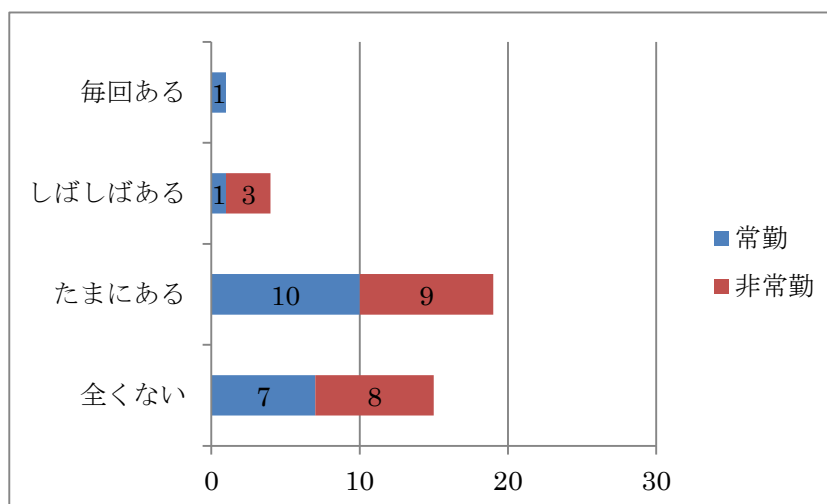


図6 問⑤の結果

問⑥ 障害のある学生が自分の必要な配慮事項について、能動的に先生方に伝えたと思うか。

図7のような結果が得られた。「とてもそう思う」と回答した教員が全体で12人、「少しそう思う」が20人であった。障害のある学生が能動的に支援を周囲に求めることができるようになるよう、学生に対し支援を行っていく必要があることがこの結果から分かる。

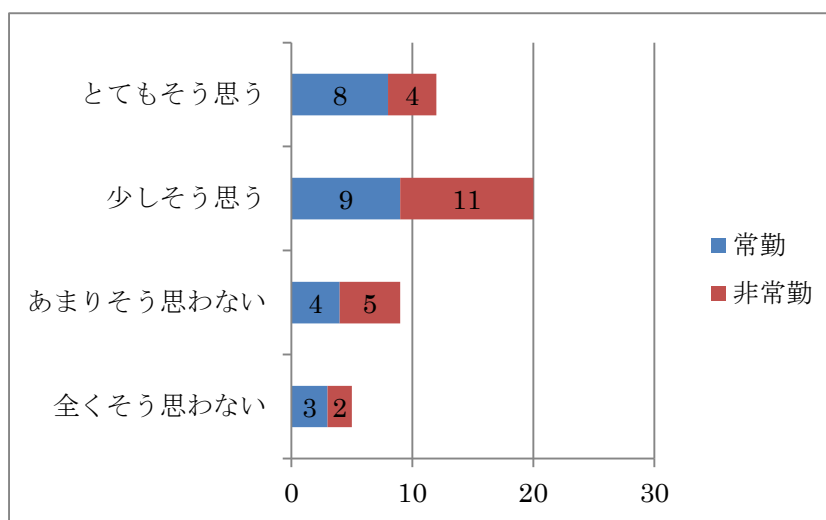


図7 問⑥の結果

問⑦ 障害学生支援センターより送付した、障害のある学生への配慮依頼文書は十分に理解されましたか。

図8のような結果が得られた。「とてもそう思う」と回答した教員が全体の58%であり、配慮依頼文書は、理解されている傾向にあることが分かった。しかし、「あまりそう思わない」と回答した教員も全体の6%おり、配慮依頼文書をより一層理解しやすいものとしていく必要があることが明らかになった。

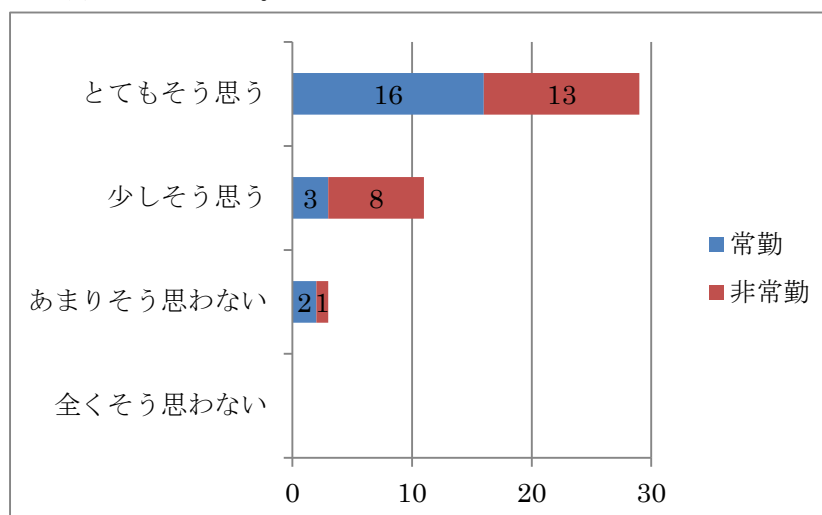


図8 問⑦の結果

問⑧ 障害のある学生への支援を行うにあたって工夫した点について記述して下さい。

障害種別にまとめたものを表1に示す。

表1 支援を行うにあたって工夫した点

視覚障害	
資料、教材、 板書について	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイントをタブレット PC にうつして、視覚障害学生の手元で閲覧できるようにした。 ・映像資料が見つらなかった場合には、DVD の貸出を提案した。 ・板書の際は、大きな字を書くように心がけた。 ・資料の拡大。 ・シンプルかつ大きな文字の資料づくりをするよう心がけた。 ・聴覚的な支援に努めた。
授業に進め方について	<ul style="list-style-type: none"> ・一緒に受講している周りの学生にも配慮するよう、心がけた。
聴覚障害	
話し方について	<ul style="list-style-type: none"> ・明瞭に話すことを心がけた。 ・ゆっくりと話したり、ジェスチャーを加えたりした。 ・常に視線を向け、理解度を気にしたり、話を中断させたりした。
資料、教材について	<ul style="list-style-type: none"> ・資料を多く配布するなど、視覚的な支援に努めた。 ・スライドを活用した。 ・講義資料を「独自の資料（出来る限り講義内容を説明する通りに文字で作成）」をテイカーともにわたした。 ・配布プリントに行数を書き込み、参照しやすくした。 ・テイカーに使用するスライド等を事前にわたすようにした。 ・視聴覚教材への字幕挿入依頼を行った。
授業の進め方について	<ul style="list-style-type: none"> ・説明後にノートをとる時間を与えた。 ・できるだけゆっくりと授業をすすめ、資料は多く準備した。 ・TA あるいは、友人に近くに座ってもらうようにした。 ・動きのある授業では、日頃から知っている学生にも同じグループに入ってもらうようにした。 ・授業前にグループ活動の内容や方法を説明し、参加可能かどうかの確認を行った。 ・口頭での説明が早すぎた場合には、事後に補足説明を行った。
支援機器の活用	<ul style="list-style-type: none"> ・FM マイクをつけるようにした。（学生から依頼） ・個別指導時には、筆談またはスマホアプリを活用した。

その他	<ul style="list-style-type: none"> ・話すスピード、授業内容や資料の理解はできたかについて、声をかけてコミュニケーションを図った。 ・要望が出やすいように、学生に声かけを行った。 ・クラスの雰囲気づくり、授業内容、教材において出来る限りの工夫を行った。
内部障害	
授業の進め方について	<ul style="list-style-type: none"> ・授業前後に時間的余裕を持たせるようにした。 ・試験については、本人と相談して、配慮を行った。 ・授業前後に声をかけ、状況を確認したり、相談してくれるように指示したりした。
試験について	<ul style="list-style-type: none"> ・本人と相談して、配慮を行った。
精神障害	
	<ul style="list-style-type: none"> ・学生本人が申し出た場合、欠席分を別途、課題で配慮したりした。
発達障害	
	<ul style="list-style-type: none"> ・一緒に学習する仲間をつけた。 ・学生本人が申し出た場合、欠席分を別途、課題で配慮したりした。
共通	
授業の進め方について	<ul style="list-style-type: none"> ・本人に参加の仕方を聞くとともに、周りの学生にも協力を求めた。 ・支援内容が適切か、本人に確認するようにした。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時間外での質問を積極的に受け付けたり、試験の予想問題を渡したり、評価を多面的にしたりするなどの配慮をした。

問⑨ 障害のある学生への支援を行うにあたって不安な点について記述して下さい

障害種別にまとめたものを表2に示す。

表2 支援を行うにあたって不安な点

視覚障害	
教材について	<ul style="list-style-type: none"> ・学生のプレゼン中心の授業だと、資料を学生が作成するのと、実際に提出する学生もいるため、事前の拡大ができない。 ・視覚教材を多く使用したため、本人がどこまで授業に参加できていたか分からない。 ・映像教材が、どこまで伝わっているか。
バリアフリー面について	<ul style="list-style-type: none"> ・段差のある講義室は大丈夫かと不安だった。
聴覚障害	
授業の進め方について	<ul style="list-style-type: none"> ・視聴覚教材を直前に用意した場合、対応できない。 ・外国語において、今後の使用についての学生の動機を考えると、モチベーションをどのように与え、高めて授業を行うべきか。 ・講義中にどうしても早口で説明してしまう。 ・授業の進め方が、これまでより若干遅くなってしまう。
評価について	<ul style="list-style-type: none"> ・外国語において、他の学生は自分の英語力と聴力に頼るが、テイクカーをつけている学生は平等なのだろうかと思ってしまう。 ・講義内容が理解できているのかどうか。
コミュニケーションについて	<ul style="list-style-type: none"> ・教員とのコミュニケーションがとれているか不安。 ・どこまで、どのように尋ねてよいのか。
支援方法、対応について	<ul style="list-style-type: none"> ・字幕挿入依頼のタイミングが難しい。 ・学外実習（泊まりあり）があるが、どの程度支援が必要なのか、大学として支援が可能なのか。
内部障害	
障害の状態について	<ul style="list-style-type: none"> ・配慮が必要かどうか、外観からは分かりにくい。
共通	
授業の理解について	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の内容が理解できているかどうか。 ・他の学生同様の学びになっているのか。
授業の進め方や事前準備について	<ul style="list-style-type: none"> ・授業のやり方（実験等の活動や配付資料、提示スライド、板書等）を根本的に変えなければいけないため、負担が大きい。 ・受講生が多いため、個別対応が難しい。 ・授業が進むにつれて、障害のある学生がいることを忘れてしまう。

支援内容について	<ul style="list-style-type: none"> ・適切な支援が十分できているのかどうか。 ・本人が納得したものであるのか。 ・リスニングがある場合への対応。 ・受講生が多い中で、障害種別の違う学生に対して授業することに難しさを感じる。 ・非常勤のため、施設の機材、照明、印刷のことなど、支援を組み合わせることに限界があるように思う。
障害の状態について	<ul style="list-style-type: none"> ・本人にどの都度、授業の理解について確認していいのか。(自分の障害を明らかにしているか。) ・本人から直接、障害の程度を聞いていないため、理解がどこまでできているのか不安。 ・学生個人の状況が詳しく分からないので、具体的な支援が難しい。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に、障害のある学生についての情報を得たい。(どういう支援が必要なのか。) ・教員側の障害についての知識が足りないこと。 ・特にどのような点に配慮すべきなのかについて、もう少し情報共有ができるとありがたい。 ・障害学生支援に関わる学生が少ない。 ・支援学生のモチベーションが気になる。 ・障害学生の積極性が足りない。 ・教職員の認識・理解。 ・障害のある学生の気持ちが理解しづらい。 ・あまり学生と話す機会がない。

問⑩ その他 障害のある学生への支援全般について、ご意見・ご提案等自由に記述して下さい。

自由記述の内容をまとめたものを表 3 に示す。

表 3 支援全般について

支援方法について	<ul style="list-style-type: none">・出来る限りの支援をすることが求められる。・テイカーの学生の存在にずいぶん助けられた。・字幕については、依頼できれば助かる。・毎回、支援センターからの応援が来るのは、授業を査定されているようでやりにくい。(特に専門が同じ人がくると)・一言一句文字にされていると思うと、言い間違いやうっかりしたことは言えないし、冗談も言いにくい。・資料の拡大コピー、テイカーの派遣に協力してもらい助かった。・大学の合理的配慮について、素晴らしかった。
事前準備について	<ul style="list-style-type: none">・ビデオの導入を決めてから日にちが短いと間に合わないと思念するということもあり、計画的にしないといけないと思った。・テイカーの学生の能力に感心し、話すスピードを十分考慮したため、勉強になった。
授業の進め方について	<ul style="list-style-type: none">・具体的なレベルでは、大学でできるサポートについて理解できていない。・授業内容や教材作成の準備段階で授業をデザインする必要があるため、障害のある学生が受講する場合は、できるだけ早く教えてほしい。・講義資料は、通常的时间配分で作成しているが、テイカーがついてこれる速さにすると、時間が足りなくなるため、どちらに合わせるべきか悩んだ。・配慮について伝えてもらえれば、可能な範囲で援助したいと思う。・受講クラス全体で共通認識を持つことが重要であると思う。・同じ授業に異なる障害のある学生が参加するよりも、別々に参加する方が配慮しやすいと思われた。・対応法について学ぶことが多く、また周りの学生の理解も良い方だと思う。
施設面について	<ul style="list-style-type: none">・どの教室にも、拡大できるカメラのようなものや PC があったり、キャビネットの鍵を取りに行く場所が共通講義棟内であればよいと思う。・人文社会教棟内や、そこから共通講義棟までバリアだらけで改善していないのが残念。・障害学生支援センターが狭く、もっと広くて目につく所がよい。
情報共有について	<ul style="list-style-type: none">・事前にどんな障害のある学生が受講するのか、大学側からの詳しい説明が欲しかった。

	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を受ける前に、障害の程度を知っておくことは大切だと思う。(面談や書面での通知をしてほしい。) ・必修で受講が分かっている場合は、後期科目の場合でも前期の間に知りたい。 ・初回の授業時にパソコンを使って、講義記録をする支援者がいたが、事前に知らされていなかったため、戸惑った。 ・学生から障害があるとの申告を受けていないので、気づかなかった。
障害理解・認識、 研修について	<ul style="list-style-type: none"> ・障害のある学生がどんなことに困っているかなどを学ぶ機会 (FD など) があるといい。 ・一般の教員が、障害者に関する理解をもう少し持っておいた方がいいと思う。
コミュニケーション について	<ul style="list-style-type: none"> ・本人の思いや願いを知るための工夫が必要だと実感している。(本人と話す場をつくる、調査用紙の作成・記入による情報など) ・個別に話す機会を作って話してみたが、遠慮もあるのか、あまり要望がきかれなかったように思う。
支援体制について	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚障害や聴覚障害の学生への配慮として、授業のやり方(実験等の活動や配付資料、スライド、板書等)を 根本的に変える場合のサポート体制(手話を行える人の派遣や点字に置き換える作業、字幕挿入等)どの程度、本学で整備されているのかの情報が不足している。 ・大学主導ではなく、ピアサポートのような状態にもっていくことが望ましい。 ・行き届いたこの種の配慮に敬意を示します。 ・支援について第三者評価が必要。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・教師を目指す学生は良く理解しているので、現状で良いのではないか。 ・大学として体制を整えるのと同時に、場面に応じて必要な支援を獲得する力を本人が培っていくことは、今後も重要。 ・式典では対象学生に障害学生がいなくても、保護者も支援対象として認識して準備する必要がある。(案内文や HP に記載する。) ・大学の授業において実体験として学ぶことのできるメリットに対して、進行速度や内容量の減少というデメリットの割合をおさえる工夫が必要。 科目数が減りすぎて、これらの工夫をする余裕がないため、教員と学生の選択肢を広げるようなカリキュラムの工夫を検討する必要がある。 ・学生アルバイトの予算があれば、授業準備する際に、障害のある学生のことを考える精神的余裕がでるかもしれない。 ・学生自身の成長のためにも、自身の学習のために支援してほしいことは

何か、その内容のどこが困るのか表明していただきたい。

- ・選択科目を積極的に受講し、いろいろな資格の取得を願っている。健常者の理解・共生につながると思う。
 - ・障害のある学生の大学教育を推進すべきだと思う。
 - ・全ての学生に学びの機会が保障されるべきと思う。
 - ・本人が明確に支援内容を伝えていける力をつけていくと卒業後も役立つと思う。
 - ・教育制度の改変期にあたり、時事的な内容を多く取り入れた授業が増加すると考えられるため、センターのますますの発展と即応性、柔軟性の高い支援業務の開発に期待している。
-

4. まとめ

アンケートの中で二つのことが明らかになった。一つは、担当教員が障害学生支援をどのように考えているのかである。問 10 の自由記述欄を見ると、「障害を持つ学生の大学教育を推進すべき」、「全ての学生に学びの機会が保障されるべき」といった意見が見られ、障害学生支援の意義について教員内で理解が進んできていることがわかる。その反面、「パソコンテイク支援方法について一言一句文字にされることに抵抗がある」という意見もあった。このような意見に関しては、利用学生の声や体験談を積極的に伝えていくことで教員の見方も変化していくのではないかと考える。

二つ目は担当教員が障害学生支援センターに求めていることである。教員は障害学生支援に協力したいが、障害を持つ学生とのコミュニケーションをどう進めていけばよいかや、理解度の把握の難しさ、新たな授業準備の負担感があるということが伺える。また、障害学生を授業に受け入れたことによる進行速度の低下や内容量の減少を工夫して改善したいとの声もある。このような意見が出る背景には、障害学生支援センターの機能・活動内容がまだ教員に十分認知されていないことが考えられる。教員がもっと障害学生支援センターを活用しやすいよう過去の相談内容や、具体的な利用方法を載せた教員向けチラシを作成し、学内に配布すると、センターへの相談が増えていくのではないかと考える。

今後は、教員アンケートにある意見を参考に、学生や教員からの個別の相談対応を積み重ねることによってセンターの機能をより強化していきたい。